

【田子町はこんな町】

総面積の約80%を山林が占め、畑作を中心に水稲と畜産の複合経営農業が主流の町。主に、にんにくと田子牛を特産とし、毎年10月には「にんにくとへごまつり」が開かれます。



将来的には、教育や文化・経済・防災など幅広い分野での活発な交流による町の活性化に向けた取り組みを行っていく予定です。

「田子」と書いて「たっこ」と読む田子町は、青森県の最南端にあり人口は約6,300人。豊かな自然のもと農業を基幹産業とし、日本一の「にんにく」の産地として名高く、にんにくが取り持つ縁でアメリカ合衆国や韓国など海外の都市とも交流が盛んな町です。

交流を足掛かりとしてお互いが活性化できないか？と「たこまち」から「たっこまち」へ声をかけたのがきっかけでした。多古町で5月に行われた田植え体験事業に招待したことから交流がスタートし、6月の「あじさい祭り」の式典では山本晴美町長にごあいさつをいただきました。また、出展した田子町のブースでは町の紹介と特産の「にんにく」をPRしました。10月には、田子町で開催されたイベント「にんにくとへごまつり」に多古町と道の駅出品者協議会が参加して町の特産品を田子町のみなさんにPRしてきました。さらには、お互いの加工品や農産物などを販売し合うことで、PR効果と販路の拡大にもつながる取り組みとして、11月から田子町の「にんにく加工品16品目」を道の駅あじさい館のレジ前コーナーにおいて発売しています。

田子町との「おいしい」関係



多古町と田子町との交流

- 1 4 「にんにくとへごまつり」にて多古町の産品をPR
- 2 田子町役場を訪問。交流について話をする両首長
- 3 あじさい館で発売中の田子町産品
- 5 あじさい祭りで賑わう「田子町ブース」

多古町ネットワーク、広がっています。

交流による活性化を目指します

町の農産物やイベントなどを通して交流を深め、お互いの活性化につなげようという取り組みが始まっています。

「どろろ」で長くくつながら「ねぎしフードサービス」

東 東京都内に32店舗を展開し、「牛たん十とろろ+麦めし」という高タンパク低カロリーで女性にも親しめ、健康にも美容にもお勧めのメニューで大好評の「ねぎし」。良質のたんぱく質やミネラル、でんぷんの消化を助けるジアスターゼ酵素を豊富に含む栄養価の高い大和芋をすりおろした「とろろ」ねぎしの店舗で使われる「とろろ」は全て多古町産の大和芋。この大和芋の供給を担うJA多古園芸部では、ねぎしの社員と市場関係者を招いて毎年10月にサツマイモや大和芋の掘り取り体験を交えた収穫祭を開催し、町の生産者と交流

を深めています。また、町とJAはこの11月13日から20日までの一週間、ねぎしの30店舗におけるご飯に多古米を使用する多古米フェアを実施しました。さらにこのキャンペーン期間中は、新たに作った多古キューブ米のプレゼント企画も実施し、都内における多古米の認知度アップを図りました。今後も、多古町の美味しい農産物をもっと多くの方々を知ってもらいたいという町の想いと、より美味しいものを消費者に食べてもらいたいと願う「ねぎし」の間で、さらに交流を深めていきます。



【都内でも大好評!】

「多古米はふっくら炊きあがる感じがしますね。常連さんも『お米変わった? おいしくなったね』と話されますよ。キューブ米もあつという間になくなってしまいました」と、フェアの様子を有楽町店の店長は話してくれました。



ねぎしと市場関係者を招き、秋に開催される収穫祭

- 6 収穫体験の畑へ案内するサツマイモ部会長
- 7 市場関係者と生産者との交流が深まります
- 8 10 大和芋の掘り取りをするねぎしの社長と社員
- 9 収穫祭であいさつをするJA高木組合長